

## 令和5年度 (インクルーシブ教育実践研究校 A) 報告書 五日市東学校

## 1 学校の課題

授業改善を進める中で、個別の指導計画に記載された目標や手立てから関連付いた、授業の中での個々の目標設定の必要性を感じている。指導と評価の一体化に取り組んだ前年度の研究を生かし、個別の目標設定を意識した授業づくりに取り組みたい。

## 2 研究主題

「一人も取りこぼさない教育」を目指す学校体制に根ざした授業改善の推進 ～適切な実態把握に基づいた個別の目標設定がされた授業づくりを目指して～

## 3 取組内容

## (1) 実態把握に基づいた個別の目標設定がされた授業づくり・授業改善

- ・ 自校の研究推進と連携し、インクルーシブ教育の推進に向けた授業実践を、生活単元学習(知的障害特別支援学級)、算数科(自閉症・情緒障害学級、通常の学級)を通して行い、分かりやすいめあての掲示・個別の支援の充実が図れるように授業づくりを研究する。
- ・ 授業の中で、個別の支援や手立てが必要な児童を想定して、つまずきそうな箇所ではどうするか、その児童の個別の達成してほしい目標は何かを明確にして授業を行うことで、支援の必要ない児童にとってもわかりやすい授業を目指し、そのために必要な視点について研修を行う。
- ・ 児童の実態把握や支援方法を考える「児童支援部」を校務分掌に位置づけ、実態把握や教育相談の窓口となり校内の情報を集約している。その情報から、児童に必要な支援方法を考えたり、学習サポーターの配置や、ケース会議を行ったりすることで、より児童に応じた支援を行える体制を整える。

## (2) 実態把握に基づいた評価について

- ・ 算数科を通じた授業実践を行い、毎回の授業後にアンケートを行うことで児童の算数科への意欲の変化や、理解度を把握する。
- ・ 生活単元学習を通じた授業実践を行い、適切な役割をもたせることで、児童間の関りが変化することや学習意欲が向上することを実態として把握する。

## 4 検証結果

研修部の研究推進に位置付けて取り組みを進めた。特別支援学級においては児童の実態に応じて個別の目標を設定することは当然のこととして行ってきたが、その取組を通常の学級においても生かすべく取り組んだ。

授業の中で行う支援を三つに定義し、ユニバーサルデザインの視点を生かした、誰もが分かりやすい支援を「一次的支援」、つまずきや反応を予想した支援を「二次的支援」、個に応じた支援を「三次的支援」として校内で統一し、「三次的支援」が必要な児童の中からクラスごとに1名ず

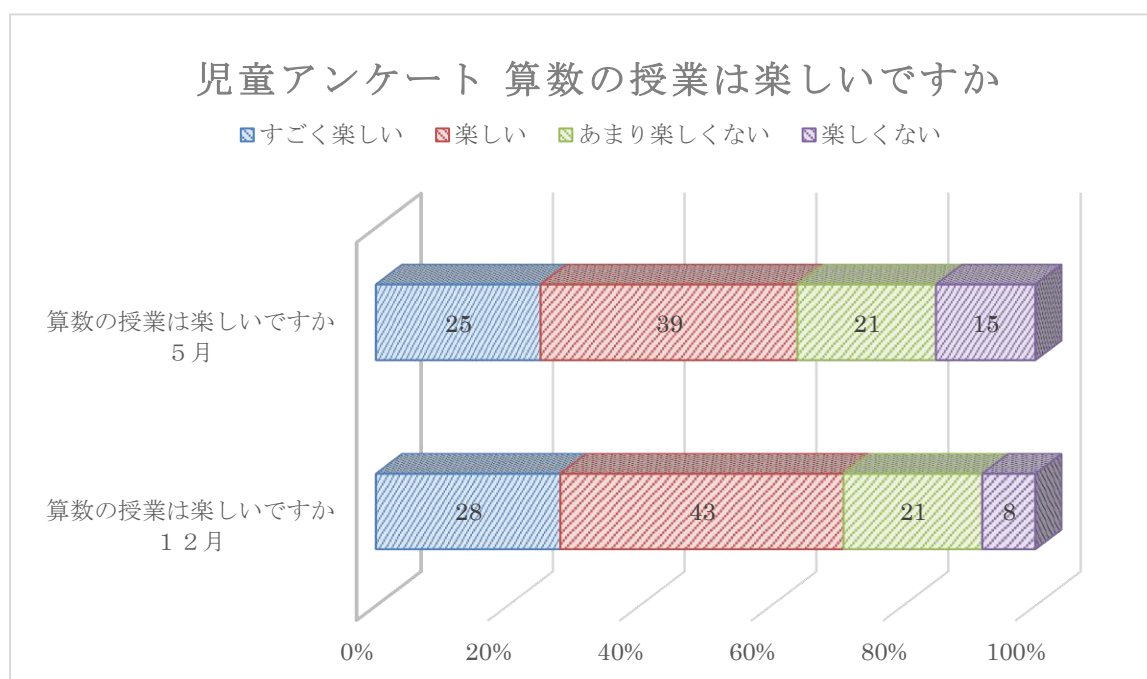
つ抽出して単元での個別の目標を設定し、変容を見取った。

これらの取組の検証のため、取組内容に対して児童や教員にアンケートを行った。その結果、教員アンケートからは、「個別の目標を設定することによって、児童の実態に応じて達成すべきものははっきりし、教えやすくなった。」という意見や、「児童の実態によっては、児童が自分で取り組むことができるように、プリントの量を調整するなど行った。」という意見が挙げられた。

研究仮設についての肯定的評価の意見として、三次支的支援を必要とする児童に視点を当てると、研究仮設の設定は適切であり、実証できたと感じている教員が多かった。「児童自身が、研究授業を通して身に付けた力を、次の授業に繋げることができていた。」という意見や、「勉強に取り組む姿勢がやってみようという姿勢に変わっていくような変容も見られた。」という意見が挙げられた。

研究授業の該当単元で毎時間授業後に行ったアンケートでは、その時間の授業の内容が分かったと実感している児童の人数は全体の80%以上という結果が出ており、教員の取組が児童の分かる授業につながっていることが分かった。

また、児童の長期的な変容を見取るための児童アンケートは全3項目で実施した。授業での変容と、年間を通しての教科への意識の変容を見るために、「算数は好きですか」「算数は得意ですか」「算数の授業は楽しいですか」と設定して行った。中でも「算数の授業は楽しいですか」という問いに肯定的な変化が表れていた。



この結果は、授業改善だけでなく、児童に必要な支援方法を考えたり、学習サポーターの配置や、特別支援教育コーディネーターの巡回をしたりすることで、より児童に応じた支援を行える体制を整えることも児童の学習を支援できたのではないかと考える。

知的障害特別支援学級の授業改善においては、生活単元学習で実践した。

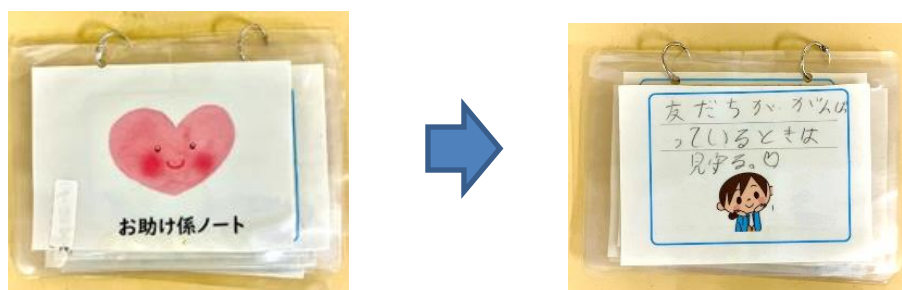
なかよし1組（知的障害特別支援学級）は、2年生から6年生まで計4名が在籍している。児童の実態は様々であるが、共通して興味や関心のある活動に意欲的に取り組む姿が見られる。一方で、活動に集中できる時間が短く、見通しがもてないことへの不安感やこだわりから、活動に

自分から向きにくい場面も見られる。また、時間経過によって学習内容があいまいになり、関心や意欲が低下する様子も見られ、学習の積み上げが難しいという実態もある。これまでの学級での様々な取組を通して、児童同士で互いに意識し合い、関わるようになってきた。特に、6年生の児童は、最高学年として学級の中でも役割を担いたいという思いや、年下の児童のことを気に掛けた振る舞いがしたいという思いをもち始めている。

以上のような実態を踏まえて、生活単元学習「おやつパーティーをしよう」に取り組んだ。(12月公開授業研究会で発表) 何を作るか、誰がどの役割を担当するかなどを、自分の気持ちを友達に伝えたり、受け止めたりしながら4人で決めていき、調理に向けた準備を児童主体で進めていった。また、6年生の児童については、全員で分担した役割に加え、レシピ係や司会、お助け係という全体に関わる役割を担うことで、自分だけでなく学級全体を考えながら取り組むことができるようにした。

児童主体で取り組んでいくことで、児童が自分たちの力で目的を成し遂げようと、自分から活動に取り組んだり、友達の取り組む姿に関心をもって見守ったり、必要な働き掛けを行ったりする姿を引き出すことができた。特にお助け係を担当した児童は、これまでの自分の姿を映像で振り返ったり、場に応じた友達との関わり方を教師と確認したりしたことで、友達の頑張っている姿を受け止めて見守ったり、必要に応じた手助けや言葉掛けをすることができるようになってきた。

写真の「お助け係ノート」はお助け係の児童への支援として作成した。めくると活動に応じたお助け方法を見ることができる。係の児童とこれまでの学習の動画を見て、お助け方法を確認しながら一緒に書いている。この支援を行うことで、適切な距離感での「お助け」ができるようになったという変化があった。本単元以降も、ここで作成した内容を覚えており、他の活動でも活用にも生かすことができている。



算数科の取組も、特別支援学級の取組も、共通して言えることは、児童の実態に基づいて、支援を考えた授業を行っていることである。どの教員も、児童の実態から授業を組み立てようとするのがスタンダードになっていることを授業実践から感じている。

## 5 研究成果

「一人も取りこぼさない教育」を目指した、実態把握に基づいた個別の目標設定がされた授業づくり・授業改善に取り組んだ。教員のアンケートから、個別の目標を設定することによって児童の実態に応じて達成すべきものがはっきりし教えやすくなったという意見が挙がり、抽出した児童に対して、個別のゴールを考えて授業づくりを行うことが、結果として、学級全体への支援の充実にもつながっていたという実感を、多くの教員がもつことができた。

知的障害特別支援学級においても、同様に個別の目標が適切であることが他の児童の力も引き出すことにつながるという実感を教員がもつことができた

個別の実態は様々で、常に正しく実態把握ができるわけではなく、どのように分析するか、ま

た、学習に参加できない児童への対応をどのようにするかなど、実態把握の難しさを解決していくことは今後の課題であると言える。

今年度の取組は、一人一人の児童の実態の把握の大切さに気付き、校内で適切な実態把握に基づいた、個に応じた目標設定のある授業づくりのスタンダード化につながっており、児童のアンケートからも、肯定的な変化が見られた。

個別の実態に基づいて授業を行うことが、どの学級においても効果的であり、個別の実態に基づいて児童に対応しようとする教員の意識改革から、授業改善につなげることができた。